

センターでの思い出

著者	高橋 洋一
雑誌名	SENAC : 東北大学大型計算機センター広報
巻	45
号	2
ページ	90-91
発行年	2012-04
URL	http://hdl.handle.net/10097/00124683

〔退職のご挨拶〕

センターでの思い出

東北大学情報部情報基盤課 高橋洋一

この3月で退職を迎えました。昭和48年1月に、サイバーサイエンスセンターの前身である大型計算機センターの運用部に配属となりました。運用部は、事務部と研究開発部の中間で計算機を利用者にサービスする部署でした。

運用部の仕事は、利用者への利用支援、システムの操作、システム管理、運用に必要な技術開発などが主な業務でした。私はシステムの操作が主な仕事でしたが、ほかに定期的なファイルバックアップ作業や課金・統計に必要なプログラムの開発なども手がけておりました。

この頃の計算機システムは、NEAC2200-700 (OS MOD7)と NEAC2200-500 (OS MOD4)で、計算機システムの起動、停止、OS の監視等のシステム操作は、すべて手動にて行っていました。NEAC2200-700 はバッチ処理専用で、NEAC2200-500 は TSS サービス専用となっていました。サービス時間は 10:00～17:00 まで、繁忙期 (12 月～2 月) は 10:00～21:00 まで延長していました。昭和 50 年には 24:00 まで、昭和 53 年には 24 時間のサービスとなりましたが、処理しきれない状態が終日続くこともありました。ジョブの入力は、パンチされたカードを読取装置で、手動で入力しました。その入力時やラインプリンタ出力時の騒音は非常に大きく、健康に配慮しながらの操作でした。

昭和 51 年には、計算機システムも ACOS シリーズに代わり操作もだんだんと改善され、自動運転も出来るようになり、昭和 63 年には、スーパーコンピュータの SX-1 が導入されました。その後は、汎用コンピュータもスーパーコンピュータも数年周期で更新され、システムの操作は自動運転が主流になり、サービス時間も 24 時間運転が当たり前となりました。

私が一番印象に残っているのは、平成 6 年にセンターが片平より青葉山に移転する際の建物建設についてのことです。建物の設計では、初めての経験であり、また施設部の考え方と合わないところも多数あったため、何度も施設部に通い打ち合わせを行いました。中でも大きな問題になったことは、計算機を設置する広いマシン室の真ん中に柱があったことです。この柱があると数年ごとに更新する計算機を効率よく設置出来ない為、柱をとることを要求して設計からの見直しとなりました。また、計算機の更新時の搬入口の設置場所でも二転三転しました。このことで学んだのは、絶対必要なものは、妥協しないということでした。

もう一つの思い出は、青葉山移転後の計算機更新時、分散処理の運用に即した利用者管理、課金管理も見据えた運転管理システムの構築に携わったことです。この運転管理は、ソフトウェア、ハードウェアの改造が必要だったため、メーカーの技術者も含めプロジェク

トを立ち上げ幾度となく討論を交わして構築し、平成 9 年の 3 月より運用しました。その後も計算機が導入される度に、色々なことがありましたが今となっては良い思い出です。

話は変わって、大型計算機センター時代から今でも続く親睦会のびっと会（カタカナのビットではない）について触れます。その昔に T 先生が職員ひとりひとりがやわらかいびっとで構成されるようにと名付けた様に伝え聞きました。現在は、歓送迎会がびっと会の主な行事に成りましたが、私が勤め始めた頃は、職員の人数も今より多く春のスポーツ大会、花見、ビール祭り、秋のスポーツ大会、芋煮会、時にはバス旅行など盛りだくさんでした。特にスポーツ大会では、全職員が 2〜3 チームに分かれ、ソフトボール、バレーボール、時にはバドミントン、卓球など昼休みなどを利用し 2 週間ほどの日程で行ったことが思い出されます。

人生でもっとも忘れられないことがあの大震災（2011. 3. 11）です。丁度その日にびっと会の行事が予定されていました。大震災で人生観が変わりました。これから先、何が本当に大事なのかを残りの人生で考えていきます。

長い間大変お世話になりました。どうもありがとうございました。
みなさまのますますの発展をお祈りいたします。